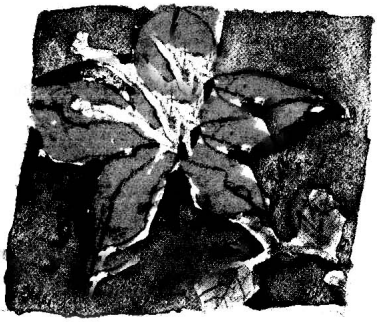
阿刀田高
Atohda Takashi

花の図鑑

上

日本経済新聞社

花の図鑑



上

日本経済新聞社

花の図鑑　上

著者　阿刀田 高（あとうだ・たかし）

©Takashi Atohda 1987

昭和62年3月19日　1刷

発行者　前田　哲司

発行所　日本経済新聞社

東京都千代田区大手町1－9－5　〒100

TEL（03）270－0251　振替・東京3－555

印刷・広研印刷　　製本・大口製本

ISBN 4－532－09781－9

目次

ハイビスカス　5
黒百合　65
かとれあ　109
梅もどき　161
ポインセチア　213
迎春花　271
花蘇方　329

装丁　村上豊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

花の図鑑　上

ハイビスカス

バンコク郊外のドン・ムアン空港を飛び立って一時間あまり、南シナ海の上空で機体が二度、三度大きく弾むように揺れた。

機内に息を呑むような気配が流れた。

タイ航空六四〇便、香港、台北を経由して今夜遅く成田へ着く予定である。

タイ語に続いて英語のアナウンスメントが聞こえた。だが、声が低くてよく聞き取れない。スチュワーデスが乗客のベルトをチェックして走りまわる。

すぐに収まるかと思ったが、震動はだんだんひどくなる。揺れ続ける。揺れるたびに機体がキシ、キシと耳障りな悲鳴をあげる。

――こんなところで死んだら、かなわんなあ――

中座啓一郎は通路側の座席で目を閉じ、神経を鋭くして機体の軋みを計った。

とはいえ格別な知識もない者になにかがわかるはずもない。ただ耳をそばだてて不安を塗り直しているだけのことだ。

事故はいつ起きるかわからない。滅多にないことだが、起きるときはかならずどこかで起きる。それに遭遇した人は「あ、いかん」と狼狽するうちに、事故が新聞やテレビの中の出来事ではなく、

身近な現実であることを知らされる。それがたった今、始まった、と、そうでない保証はどこにもない。

――ついてない――

そう言えば、搭乗予約券を見たときから不愉快だった。バンコクのホテルで、

「どうしても土曜日のうちに東京へ帰りたい」

と、チケットの手配を頼んだ。

フロントは、啓一郎の依頼を忠実に守ってくれた、と言うべきだろう。だが、あいにく土曜日にはバンコク・東京間の直行便がない。おかげで香港・台北と、ご丁寧に一つずつ停まって帰ることになった。六時間で行ける距離に十時間をかけなければいけない。この四時間の差はつらい。こんなことなら一日待って、日曜日の直行便のほうがいい。すぐに予約の変更を申し出ればよかった。

事故というものは、えてしてこんなときに起きる。そんな気がする。

出張の業務はなんとか無事にこなしたが、タイは猛暑のまっ最中だった。暑気に当てられ、おまけに腹をこわし、六日間の滞在は不調続きだった。体調を崩すと、街の匂いまでが息苦しく、耐えがたいものになる。ココナツ・ミルクのような、ドリアンのような匂い……。

――一刻も早く東京へ帰りたい――

そんな思いで搭乗したのだった。

機体の揺れは、あいかわらず続いている。ストーン、ストーンと落下する。軋みも激しい。乱気流の中で、飛行機は薄い紙のように揺れながら、必死にバランスを保っているらしい。

――ほかのことで気を紛らそう――

機体の無気味な揺れを頭の片方で計りながら啓一郎は、まず法子のことを考えた。

飛行機の運命は機長に委ねるよりほかにない。クルーにとってこの程度の震動はさほどめずらしいことではあるまい。

——落ちるものなら、もうとっくに落ちている——
不安定な状態も、五分続けば、それも一つの安定と考えることができる。
——本当にそうかな——
気を紛らすには、できるだけ刺激の強いことを考えるほうがいい。
法子の裸形を思った。
ベッドの仕ぐさを考えた。
小麦色の肌。軟かい恥毛。乳房の形もおおむね思い浮かぶのだが、どこかとりとめがない。いつも闇の中で抱きあっているせいだろうか。
また機体がエア・ポケットに入ったらしく、大きく落下した。機内に低い悲鳴が漏れる。タイ語と英語のアナウンスメントが流れる。
もし一瞬の最期が来るものならば、せめて脳裏に女の顔を映して死にたい。
——やっぱり法子だろうか——
もうひとり田川薫を思い浮かべたが、これはあわてて掻き消した。
どうしてこんなときに薫を思い出したのかわからない。最近、時折立ち寄っているスナック・バー〝かとれあ〟のママ。こんなところに現われる人ではない。
——二人も連れてったら、あの世でトラブルが起きそうだし——
馬鹿らしいことを考えるのは、まだ余裕のある証拠だろう。
それに……知らない世界に一緒に行くのなら、法子のほうが断然よい。見聞も広いし、頼り甲斐もある。あの世へ行っても、思いがけないところでキャリア・ウーマンの敏腕さを発揮してくれるだろう。
——虫がいいかな——
法子は「あたし、厭よ」と、さからうかもしれない。そう言われても仕方のない間柄だ。

――ほかの乗客は、だれを心の道連れにするのだろう――

家族だろうか。いまはのきわに映すのは、やっぱり妻や子のイメージなのだろうか。

啓一郎には、それがない。三十五歳で独身。父がいる。妹が二人いる。家族四人で暮らしている。みずから選んでそうしているところもあるけれど、なりゆきとしか言いようのない部分もある。

一番親しい女は……やはり千倉法子だろう。学生時代に知り合ったのだから、もう十数年の交際になる。たとえて言えば、男同士の友人。人生を語り、悩みをうちあけ、励ましあい、喜びあい、そのくせ忙しさにかまけて御無沙汰を続けても許されるような親しさ、あれに近い。違うのは、会えばたいてい体を重ねること。友人と呼ぶには異質の部分がある。恋人という表現もなじまない。

驚いたことに千倉法子の面差しが、はっきりと浮かばない。もちろん目とか鼻とか唇とか髪型とか、

――こんな感じだな――

と思う姿は浮かぶのだが、どことなく頼りない。むしろテレビ・タレントのだれそれのほうが鮮明に顔立ちを描くことができる。前にもそんなことがあった。それを法子に話した。

「あなた、あんまり絵がうまくなかったんじゃないのかしら、子どもの頃」

それが法子の返答だった。

「ああ、下手くそだった」

ほかの学科はそこそこの成績をもらっていたが、図画工作だけは苦手だった。

「造形をしっかりと頭の中にプリントするのが不得手なんじゃないのかしら」

「そうかもしれん。あなたは大丈夫か」

法子の職業は……啓一郎も正確にはわからないのだが、ひとくちで言えば文化貿易業。日本のさまざまな団体の依頼を受けて、ヨーロッパの芸術を紹介する。収集し借用し輸送し展示し、そして販売する。芸術と言っても、法子の場合は、絵画がほとんどである。目下のところは、画商に近い。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

年齢はまだ若いが、敏腕なジャポネーズとして知られているようだ。法子自身、実際に絵筆が取れるかどうか知らないけれど、絵画は職業の一部である。

「そりゃ、まあ、中さんよりはましみたい」

と笑っていた。

〝中さん〟と呼ぶのが、いつの頃からか法子の言い方になっている。

法子は、いつでもしっかりと啓一郎のイメージを脳裏に映すことができるのだろうか。法子に限らず世間の人はたいてい親しい相手をまのあたりに浮かべることができるものなのか。

法子の声が響く。

「人間て、みんな少しずつ違うと思うの、持っている感覚が。音楽的に鋭い人は、そういうふうに世の中を感じ取っているでしょうし、色彩感覚のいい人は、やっぱり普通の人と違った色合いで世界を見ていると思うわ。昆虫が見ているのと、人間が見ているのとは、まるで違うんでしょ。人間同士は、それほどひどくないでしょうけど、それでも微妙に違うみたい。このお仕事をやっていると、よくそう思うわ」

たしかにそんなこともあるのかもしれない。絵の下手な啓一郎は、この世界を、形の面でも色彩の面でも、ずいぶんいい加減なレベルで認識しているのだろう。

気がつくと、飛行機の揺れが少しずつ収まり始めたようだ。機内に安堵の息が広がる。法子のことを想像したのは成功だったらしい。

飛行が正常に戻ると、紅茶とビスケットのサービスが始まった。啓一郎は匂いの強い紅茶を飲んだあと、少しまどろんだ。次に降下を感じたとき、香港の啓徳空港に着陸するアナウンスメントが聞こえた。

雲海を抜けると、左右の窓に低い山陵が見え始めた。と思うまに右手の山が消え、空を映し、左手の山は麓の赤茶けた岩礁から海のきわまでを示す。飛行機が旋回し、もう着陸はすぐらしい。

啓一郎は香港を知らない。昨今は、ショッピングのためや、本場の中国料理を食べるためやらで香港を訪ねる日本人も多いらしいが、啓一郎はなんの関心もなかった。たまたまバンコクからの帰り道に着陸するだけのこと。むしろ迷惑なくらい……。航空会社がくれたパンフレットを見ると、啓徳空港には一時間ほど停まっているらしい。

――香港までのお客を降ろしたら、すぐに飛び立てばいいのに――

床下で車脚を突出させる音が響き、窓の外の風景がたちまち草地と滑走路に変った。

ド、ドーン。

重い衝撃が伝わる。本日の操縦士は、中の下くらい。巧みな着地とは言いがたい。タイ語と英語のアナウンスメントが、注意事項をいくつかに分けて交互に伝えている。タイ人の話す英語は、とても聞き取りにくい。今回の出張で何度かそう思った。

一般には、英語国民以外の外国人が話す英語は、日本人にとって聞きやすいものだが、タイ人の場合はどうも例外に属するようだ。啓一郎の英語力が足りないせいもあるけれど、それだけではないらしい。機内のアナウンスメントも微妙に訛っている。

一時間の待ち時間なら、わざわざ空港ロビーへ降りることもない。啓一郎は機内で本でも読んでいるつもりだったが、アナウンスメントは、全員機外に出てくれ、と告げている。手荷物も持って行ってくれ、と言っている。

笑窪のかわいいスチュワーデスをつかまえて、

「ここにいてはいけないのか」

と尋ねたら、愛敬のある笑顔が返って来て、

「いったん降りてお待ちください」

である。仕方ない。ワイシャツの袖をおろしカフス・ボタンを留め、ネクタイを締め直し、上着を着て、それから本、ライター、タバコ、身のまわりの品をスーツケースに納め、おもむろに席を

立つ。身仕度をするのも面倒だったが、
――一刻も早く東京へ帰りたい。降りたり乗ったりするのは余計な手間じゃないか――
子どもみたいに拗ねていた。啓一郎ひとりが機内に残ったところで、飛行機が早く飛び立つわけではあるまいが……。
空港ビルに続くデッキを歩いていると、数メートル先に女性のうしろ姿がある。グリーンのブラウスに、ピンクのスパッツ。闘牛士のパンツみたいにぴったり脚について、なまめかしい。
――一人旅かな――
服装の色合いから判断して、タイの人だと思った。
長く伸びたデッキから空港ビルへ。細い改札口を抜けたときには、女の姿は消えていた。機内でも、
――あ、きれいな人だな――
と思った記憶がある。目で追ったが、もう見えない。
案内係のスチュワーデスに、
「何時に乗るの?」
と英語で確かめた。
「放送がありますから、それをお待ちください」
「ここで待ってれば、いいの?」
「はい。放送がありますから」
答えてはくれるが、もうひとつ要領を得ない。
ただぼんやりと廊下で待っていてもつまらない。廊下の先には待合所をかねたロビーがある。みやげものを売る店やスナックもあるらしい。腕時計は三時過ぎだが、空港の時計はそれより一時間あとを指している。とりあえず空港の時間に腕時計をあわせた。気がつくと、バンコクのホテルで

軽い朝食をとって以来、機内でビスケットを一枚食べただけだ。ポケットにドルの小銭が残っている。ロビーのスナックにすわってサンドイッチとコーヒーを頼んだ。

喧騒をぬって案内のアナウンスメントが流れてくる。英語のほかに中国語らしい言葉が加わる。ほかになにやらわからない言葉の放送もある。いちいち聞き耳を立てなければいけない。

――出発時間から考えて、もうぼつぼつ搭乗が始まるはずだ――

ロビーの壁に大きな案内板が掲げてあって、近く出発するフライトの情報が、刻々と現われる。タイ航空六四〇便成田行きは、出発時刻こそ一六時三〇分と予定通り記してあるが、まだ搭乗開始のランプはついていない。

一六時三五分。出発時刻を過ぎても、なんのアナウンスメントもない。啓一郎は廊下を戻って、もう一度さっき降りて来たデッキの改札口付近まで行ってみた。ドアは閉じたままで人の出入りはない。しばらくそこに立っていると、タイ航空のスチュワーデスが現われたので、

「六四〇便は、まだ搭乗しないの？」

と尋ねてみた。

「まだです。放送をお聞きください」

啓一郎の英語もさほど堪能とは言えないし、むこうの返事もたどたどしい。本当に通じたのかどうか、何パーセントかの不安がつきまとう。

――ほかの乗客は、どうしたのかな――

おそらく三々五々廊下やロビーに散っているのだろう。それらしい顔もいるが、確信は持てない。日本人の乗客は、さほど多くはなさそうだ。苛立っているのは啓一郎だけなのだろうか。

ようやくタイ航空六四〇便のアナウンスメントが鳴った。啓一郎は廊下のすみに立ち、ガラス越しに知らない町を眺めながら耳をそばだてる。

アナウンスメントの内容は、「タイ航空六四〇便は整備のためもうしばらく出発が遅れます。お

ってこの放送で連絡いたしますから、お待ちください」

おおむねこんなところだった。

一時間あまりも待たせたわりには愛想がない。

――なんだ、こりゃ――

憤りが胸に昇って来る。

――こんな便に乗るんじゃなかった――

直行便を選ばず、香港・台北経由の便に乗ってしまったことが、まず腹立たしい。そんなチケットを用意したホテルのフロントがうらめしい。気がきかない。こういうときに限ってろくなことが起きない。

南シナ海の上空あたりで乱気流に飲まれ、機体がキシ、キシと耳障りな音をあげていた。やっぱりただごとではなかったらしい。あのときは、ずいぶん大げさな想像をめぐらしたが、一つまちがえば大きな事故になっていたのかもしれない。

――あわてて整備なんかして、大丈夫かいな――

これぱかりは、せかせて、よい結果の出るものではないだろう。啓一郎があせってみても事態が好転するはずもない。

廊下の椅子に腰をおろし、本を読み始めたが、すぐに立ちあがってロビーと廊下を往復する。案内板から六四〇便の出発時刻が消えている。「整備のために出発が遅れている」といった意味のアナウンスメントが、三、四回あったあと、次に聞こえて来たのは、

「タイ航空六四〇便で、台北へおいでになるお客様……」

これは別便があるから、そちらへ乗ってください、という指示である。「成田へおいでになるお客様は、そのままお待ちください」と続く。

台北行きの乗客たちが、ほっとした様子で立ちあがり、荷物を持って消えて行く。もう啓徳空港

へ着いて二時間以上たってしまった。

――まいったなあ――

あきらめの気持ちが、怒りを小さくしていたが、そのすきまに今度は疲労が忍び込む。今日だけの疲れではない。バンコク・ベリー、つまり旅行者がバンコクでなま水を飲むと、たいてい腹をこわすのだが、啓一郎も初日からこれにかかって、六日間の滞在は不調続きだった。

さいわいにバンコクを飛び立ったとたんに腹のぐあいは治った。

「あ、そうか」

ロビーを当てもなく歩いているうちに、気がついた。今までどこに隠れていたのか。グリーンのブラウスがスナックの脇に立っている。

どの空港も平面図を頭に描くのは、むつかしい。とてつもなく大きい。みんな複雑に作られている。いつも同じゲイトから出発するとは限らないし、到着も同じところではない。そのうえ、そうしょっちゅう利用するわけでもない。まして初めて降りた空港は、構造がよくわからない。

啓一郎は飛行機を降りたあと二時間あまり、ロビーから廊下へ、廊下からロビーへ、限られた範囲を苛立ちながらうろついていた。廊下の窓から香港の町が見えないでもないが、そこへ出るためには、入国の手続きを取らなければいけない。

グリーンのブラウスにピンクのスパッツを着けた女も、当然この範囲の中にいたはずだが、啓一郎は見なかった。どこかに死角があるらしい。

タイ航空六四〇便から降りた乗客のうち台北へ行く人は、すでに別便に乗ったはずである。とすると、彼女は成田へ行く客、ということになる。

女は足もとにスーツケースを置き、壁に寄りかかっている。啓一郎は近づき、ゆっくりと前を通過し、それとなく観察した。肌の白い人だ。面差しは、サングラスをかけているのでわかりにくいが、かなり美しい。とても美しい人かもしれない。サングラスの下から、三角の、形のいい鼻が突

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com